
うりと夏休み～隼人～

ぬこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うりと夏休み〜隼人〜

【Nコード】

N2290B

【作者名】

ぬこ

【あらすじ】

うりと夏休み主人公、隼人の過去と、たった一日のオハナシです。季節は秋も半ば。うり編とあわせて読んでいただけたら嬉しいです。

「どうして？」

今日は、僕の誕生日。

「どうして、写真飾ってあるの？」

かーちゃんは、ケーキかって、とーちゃん迎えに行ってくるからいいこで留守番しててねって。

昨日の朝ごはん食べてすぐにでかけて、まだ帰ってこない。

とーちゃんは、遠くでシュジュツって受けるんだって。

病氣やつつけて、帰ってくるからって。

絶対僕の誕生日には帰ってくるから、一緒にお祝いしようって、お手紙きてたんだ。

台所や、庭には、知らない人。

シンセキっていう人とかが、変な顔してたり、泣いてたり、怒鳴ってたり。

お祝いに来てくれたのかな？

「ねえ、かーちゃんは？」

「うるさい！」

知らない人、怖いよ。

かーちゃん、とーちゃん、この人、だあれ？

「隼くん、いいこにしててねー？夕方にはとーちゃんつれてかえってくるからねっ？」

「うん！」

「明日、とーちゃんと一緒に遊園地いこうねー？」

「わーいっ！」

飛行機、今度僕も乗せてくれるって、約束の指切りして。

でも、昨日かーちゃんもとーちゃんも帰ってこなくて、一人でかーちゃんの布団でおやすみしたよ？

ちゃんと電気も消したし、玄関も鍵しめたよ。

「全く・・・だから言ったんだ！」

「え？」

「あんな男と一緒にになるなんて、馬鹿げてる！」

「ちよっと、失礼な事いわないでくださる！？」

シンセキの人は、皆背が高く、黒い服きてて。

何のことだろうって、なあにつてきいても答えてくれない。

女のひと、男のひと、ケンカしちゃうてる。

「ケンカしちゃだめだよ、かーちゃん、ちゃんとお話ししようって」

「うるさい！黙ってろっていっただろう！」

ケンカしちゃうダメだって、かーちゃんいつてたんだよ。

怒鳴ったりしちゃ、お話できないよって。

ちゃんと、目を見てゆっくり話しようって。

「とにかく！保険金はこのコ引き取る方がもらうのは当然よね？」

僕の頭に手をのせる、おばさん。
口が赤くて、ケチャップつけたみたい。

「何を言うんだ！」

「あーら、当然でしょ？ 子供に権利があるのよ？ だったら引き取
って後見する人に権利があるってもんでしょ？」

ケンリ？

ねえ、どうして、写真飾ってあるの？
とーちゃんとかーちゃんは？

「ほら、隼人、怖いおじちゃんよりこっちのほうがいいわよね？」
「なんだと！？」

しらないおばちゃんが、僕の肩をぐいっとつかむ。
赤い爪が、キラキラ光ってる。

「ねえ、とーちゃんとかーちゃんは？」

「いいからこっちきなさい。」

「僕、お留守番してるって約束したもん。」

約束したもん。いいこでお留守番してるって。

そしたら、かーちゃんとかーちゃんとお祝いして、ケーキ食べて、
あしたは遊園地いくんだ。

テレビで、かんらんしゃっていうのがあって、高くて、遠くまで
よくみえるんだって。

それで、三人でおうちみえるか実験しようねって、約束したんだ
もん。

「誰が喪主してると思ってるんだ！」

「別にアナタが勝手にやってるだけでしょう？」

「幾ら金がかかったと思ってる！！」

「そんなの知るわけ無いじゃない、アタシには関係ないわ？」

モシユ、ってなあに？

肩にのせてくれてるままの、おばちゃんの手を引っ張って聞いてみようと思つて、ぐいぐいやってしてみるけど、こつち見てくれない。

「楽でいいじゃない、あと数日もしたら遺品届くんだから、火葬の手配もなんにもなくて大してお金もかかってないでしょう？」

「葬式に通夜の金を誰が出したと思ってるんだ！」

ツヤ？

ねえ、かーちゃん、いつかえってくるの？

僕、知らない人怖いよ。シンセキの人、怖いよ。

ケーキなくてもいいから、かーちゃん、とーちゃん、はやくかえつてきて。

「かーちゃん、とーちゃん、どこ？」

「ああもう、頭の足りないガキなこと。いいい、アンタのとーちゃんもかーちゃんも、あそこ！写真あるでしょ。」

「しゃん？」

「もう帰ってこないわよ。口開けて待ってたって誰もここにはこないの。わかる？」

「え？」

おばちゃんがはあつ、と息を吐いて、頭を振る。

「そういう言い方あるか！子供には罪はないだろう！」

「引き取るのはアタシなんだから、関係ないでしょう？」

「オレが引き取る！」

「保険金目当てで？」

「お前も同じだろうが！」

ねえ、ケンカしちゃダメなんだよ？

ちゃんとお話して、仲良くなるんだって。

「いい、アンタのとーちゃんも、かーちゃんも、もういないの。帰ってこないの。死んだのよ。」

え？

「隼人。お前の両親は、飛行機が墜落して死んだんだ。もう帰ってこない。」

かーちゃんが、いった。

嘘でも、そういうこといっちゃいけないんだって。

言葉は大事なんだって。

「そういうこと、いっちゃいけないんだって。」

「いいか、嘘じゃない。もう帰ってこない。あそこに、お前の両親がいるんだ。」

「うそだ！」

「あー、だからガキっていやだわ。理解力ないわよね。」

「とーちゃんとかーちゃん、帰ってくるって約束したもん！」

「だからー、もう帰ってこないの。体が見つかるとかもわかんないのよ？あそこの写真見て、手あわせてきなさいよ。」

かーちゃん、とーちゃん、僕いや！

この人たち、僕いやだよ、早く帰ってきて！

「機体が炎上して遺体が見つかるかもわからない。隼人。」

「うそだ！」

ふわっと、体が持ち上がる。

おじさんが僕を抱き上げて、お花がいっぱい飾ってあるところに連れて行く。

とーちゃんとかーちゃんの写真。

木の箱の中には、何にも無い。

「ほら、手を合わせてやるんだ。お前の両親にな。」

「あーら、なんだかんだ言って残酷なこというのねー？ やっぱアタシが引き取るしかないじゃない？」

「やだあ！ うそつき！ 帰ってよ！ 帰ってよー！！」

強くつかまれてる腕が痛い。

足をばたばたさせて、逃げようとするけど、逃げられない。
なんで？

なんでこのひとたちはいじわるするの？

やだ。

かーちゃん、とーちゃん、はやくきて。

僕、こわいよ。このひとたち、いやだ。

「ほら、もう帰ってこないんだってば。飛行機ごと、地面に落ちたんだ物、跡形もないわよねえ？」

「こないで！ やだあああ！」

おばちゃんが、手を伸ばす。
赤い爪が、まるで血みたいで、こわい。

足をばたばたさせておじさんから逃げようとして、でも、にげられない。

「まったく、大人しくしろ！」

「はなしてよ！」

「あーあ、全くこんなガキ残してくなんて。」

かーちゃん、とーちゃん、なんで？

なんでこのひとたちこんなことするの？

「何回言ったらわかるんだ、お前はもう一人なんだよ！」

「死体でもあれば見せてやれるのにねえ、何にもないんじや理解できないわねえ？」

「はなしてよ！やだ！はなしてったらっ！」

かーちゃん、とーちゃんっ、やだ、やだ！

このひとたちこわいよ、いやだ！

「ほら、そこみてみる、もう帰ってこないんだ！」

「いないもん！ちがうもん！かえってくるもん！」

ケーキも、なんにもいらないから、はやくかえってきて、かーちゃん、とーちゃん、こわいよ、このひとたちこわい！

「・・・っ。」

・・・夢、か・・・。

「・・・はあ・・・。」

溜息が漏れる。

泣いてたのか、目がヒリヒリする。

夢の中でも、あのときの写真の顔が、見れなかった。
かーちゃんの声も、夢の中では聞けたはずなのに、もう、思い出せない。

夢でもいいから、もう一回。

もう一回、一緒に飯くったり、あの公園からの帰り道な時が見たい。

両手をつないで、ぶらさげてもらった、あの想い出。

ぐっと目をつぶって、もしかしたらっておもって、その頃の想い出を思い出そうとしてみる。

・・・でも、写真みたいに、そのシーンしか、思い出せない。

せめて、ビデオみたいに思い出せるのなら、もう一回夢でみられるかもしれないって思ったのに。

なんで、なんで思い出せないんだ。

せめて、一回くらい夢に見させてくれたって。

「……。」

額に手を当てて、ぐっと目をつぶる。
それでも、思い出せない。

「んー……。」

寝返りをうって、俺の方に転がってくる、うり。
何度か見た、この夢。

その度に、部屋で一人で朝まで眠れなくて、苦しくて。

一回くらいは幸せな夢みさせてくれって、何度も祈って、願って。
でも、誰に？何に？

神様は皆の事を見ててくれてる、だから、なんでも叶えてくれて
たら神様が疲れちゃうよね？

もっともっとつらかったり、困ってる人から順番に助けてくれて
るんだから、お願い事が叶わないからって怒っちゃだめだぞ？

……。なんて、かーちゃんとかーちゃんの言葉を思い出す。

どうして、言葉は覚えてるのに、顔も、声も思い出せないんだろ
う。

静かに寝息を立てているうりの頭を撫でる。
どんな夢、見てるんだろう。

瑠璃様、だったころの記憶を夢に見ることがあるんだろうか。
うりも、一人で寂しくて、辛くて、目を覚ましては泣いていたん

だろうか。

「！」

ぼん、と頭に後から置かれた手に、びくつとする。

「雲野？」

「……。」

「ねてるのか？」

返事はなく、ただ、ぎゅっと抱きしめられる。

俺がうりをだっこして、雲野が俺の頭を撫でるように。

「起きてるか？……おこしちゃったか？」

「……。」

返事は、ない。

ただ、頭に乗せられた腕が、包み込んでくれるみたいに。

「んー。」

ぎゅゅっと抱きついてくるうりの頭を撫でる。

きゅゅゅと腕を俺に絡ませて、頭を摺り寄せてくる。

目が覚めて、一人じゃないって、ほんとにありがたい。

目が覚めても、夢の始まりじゃない。

一人じゃない。

「おあああや?」

「・・・ん?」

「あや?」

目をしばしばさせて、こじ開けて。

一番最初に目に入るのは、首をかしげたうり。

・・・なんで疑問系なんだ?

「お、起きたのか。」

「雲野、もう起きてたのか、はやいなー?」

「朝は修行があるのでな。」

「あ、いつもの日課か?」

ん、と首をかしげて（それをうりが真似してバランス崩し、布団に沈む、）、雲野。

「いや?」

修行って、毎日するもんじゃないのか?

やったことないからわからないけど、滝にうたれたりするんだよな?

「しないぞ。滝はな?」

「って、心の声かつ!？」

「いや、目に表れている。してみたいというのなら付き合うが、この時期滝は寒かろう。」

「そ、そりゃそうだろうなー?」

沈んだままばたばたと泳いでいる、うりを抱き起こす。
滝、この辺あるのかな。

「さあ、朝餉だ。顔を洗ってくるがよいぞ?」

「って、又作ってもらっちゃったか、悪いな。」

「気にするな。晩には栗ゴハンだ。」

「う!」

「いだっ!」

雲野の言葉に大きく頷いたうりの頭が俺のアゴにしっかりヒット!
ほ、星が見えた気がしました、朝なのに・・・ってっ。

「うー。」

「あ、あー、うり、うり、ほら、・・・な?」

「何が、な?なのだ?」

下を向いて涙をためたうりの気をそらすべく、・・・っていい案
が浮かんでこないっ!

雲野に助けを求めてー・・・

「いちゃああああ!」

間に合わなかったっ!

上を向いて、水が溢れて来るみたいに涙ボロボロ零しながら、う
りサイレン。

「うり嬢。」

「うあああああ！」

すつとうりを抱き上げて、自分の目線まで連れてくると。

「私の顔をよく見ているのだ。」

「うやああああ・・・うつ！？」

「ん？」

うりが、泣きやんだ・・・っていうか、なんだその反応はっ！？

「つじゃー！きああああ？・・・あー♪」

威嚇なのか驚きなのか？

とおもったら、嬉しそうにご機嫌でぺちぺちと雲野の顔を叩いている・・・が、ちょうど死角になっていて、何をしたのか見えない。

「よし、それでは朝餉にしようか。」

「って、今何したんだっ？」

「しまった、味噌汁が冷めてしまうな・・・？」

「・・・あー、わかりましたっ！すぐ顔洗って向かいますっ！」

にやりっと笑って、うりを抱えたまま居間に向かう雲野。

ご機嫌で抱きかかえられて腕をぱたぱたさせているうり。

・・・何があっただ？」

「しかし、ほんとうまかったなー。」

「そうか。それは良かった。」

「いくちゃ、ま！」

朝飯を済ませて、秋晴れの天気の下三人で向かうはバアちゃん家。自転車のイスにうりを乗せて、雲野と俺とで交互に押しながら田舎道に行く。

やっぱり旨いメシ食った後って、幸せだよなーなんてシミジミと思いつながら、澄んだ空気の中を歩くのがなんか幸せで。

今日はこれからバアちゃんところで栗拾い。

手伝いして、夕方には栗をたくさんお土産にしてもらえるとあって、気合も入るっ！

・・・てか、栗拾いなんてした事ないから楽しみで堪らない。

イガのなかに入ってるってこと位は勿論知ってる。

栗ゴハンなんて、弁当で買ったのでしか食ったことない。

・・・やべえ、超楽しみ。

「今夜は旨い栗ゴハンを作ってやろう。実に楽しみだ。」

顔がにやけてる俺を見てか、にやり、と笑いながら言う雲野。

「くいごあん！」

「うむ。うり嬢、栗ゴハンを食したことはあるか？」

「ごあん？」

「うむ。栗だ。」

「くい？」

不思議そうに首をかしげ・・・って自転車から落ちるぞっ！

「ほら、うりっ。」

「いやとっ♪」

落ちそうになった所を支えてやる。

そっか、もしかしたらうり、栗見たこと無いな？

「そしたら今日はうりの初栗の日だなっ？」

「おお、そうであったか。それでは腕によりをかけて作らねばな
？」

「くい、うまー？」

「うんうん、秋に栗ゴハンっていったらもう必須キーワードって
やつだな。こう、弁当買って食ったりしたが、嬉しくなるぞっ？」

いいよなー、秋に「今夜は栗ゴハンだ。」なんて言われて楽しみ
な事があるとかさ。

ていうか、晩御飯が楽しみで一日過ごせるっていうのが、やっぱ
いいよな。

「ふむ。隼人も期待しておれ。今夜の晩飯をな。」

「すっげ嬉しいっ！！・・・って、雲野に作らせてばかりじゃ
？」

「気にするな。隼人とうり嬢の為に作る食事は実に楽しい。」

「いくちゃ、うりもすう！」

「うむ。手伝いは大歓迎だ。」

大きく手を上げて「あいっ！」と言う（自転車から落ちそうになる）のを後から支えて、手伝いならまかせとけ！と、うりと頷く。

「こんにちわー、バアちゃん、ミヨコさん。」

「こんにちはあぁあ！」

「今日は。お世話になります。」

バアちゃん家の広い庭を抜けて、玄関へ。

ガラガラとさっきからしている音は・・・？

「あらあ、おニイちゃん達、ありがとねえー？」

「あ、どもー、・・・ってこの音は？」

きよろきよろと音の出所を探して首を振るうり。

ふらふらと庭の真ん中の方に向かって歩いていく（後をついていくニワトリーズ）が、見つからないらしい。

「う！」「コッ！」

くるっと振り返ったうりの目に入ったニワトリーズ。

お互いに時の声（なのか？）を上げると。

「あいあー！」「コケーッ！！！」「コッコッコッ！」

一目散に逃げていくうり。

「・・・あ、あー、えっとつ。」

「バアちゃん、今来るからねー、今脱穀してるのよう。」

「おお、是非後ほど見せて頂きたい。」

「脱穀・・・ってなんだ？」

にっこり笑うと、奥の小屋を指差す。

その中では、なにやら木製の箱のような、ハンドルがついたもの。その側でバアちゃんがそのハンドルを回してる・・・が、こっちに気がついて、左手を挙げてくれる。

「お米やってるのよう。今夜お土産にしてあげるからねえ？」

「おおおお！」

「実にありがたい！新米とは最高のご馳走だ。」

バアちゃんがなにやら大きな袋を抱えてこっちに向かってくる。

「バアちゃん、持つよ。」

駆け寄って、その荷物に手を伸ばし、受け取ると、ずしっと両手に重たい。

こんな重いバアちゃん持ってたのか。

「ういがー！じゃっだー！！」

「ケーッ！！」

奇声に振り返ると、うり優勢。

「ニイちゃん、ありがとねえ？それじゃ、出かけようかあ。」

「すごい楽しみっ！俺、栗拾い初めてだ。」

「あらあ、たーんと拾ってたーんともってかえりなあ？」

初めて知ったっ！

イガ、本物なんだよな？

・・・いや、スーパーとかで昔見たことはあるし、テレビでも見たっ！

けどさ？でもさ？

こんなにイガが大量にあるって、・・・すげえ。

そして、刺さるといってえ！（当たり前だがっ。）

「おニイちゃん、どうしたのー？」

「い、いやっ、ちよつとびっくりしてっ！」

「あやとー、いがー、いがいがー！」

驚く俺と、イガを指差して俺に報告してくれる、うり。

うんうん、と頷いてやると、しゃがみこんでじーっとイガを眺めている。

「こうしてねえ、割れてる所に足をかけて、挟んでねえ？」

バアちゃんが長靴を履いた足でイガを割って見せる。
山入る前に長靴を貸してくれて、履き替えてきたおかげで余裕で真似できる。

「そしたら、これをそーっと掴んでとるのよう？」
「ふむ。収穫の喜びだな。」

同じようにイガを割ると、中身から栗の実を摘んで背負った籠の中にしまう雲野。

「うわ、ほんとにキレイだなー！」

同じようにイガを割って見ると、中から出てきたのは、当然栗の実。

これが・・・すっげえキレイ。
よくさ、髪色で「栗色」とかいじゃん。でも、違うのな。

作りモンじゃねえんだよなー、なんて思わず手にとってみて、ちよつと感動。

「キレイだよねえー？バアちゃん、栗好きなのようー？」
「いがとったー！！！！」

そーっと指で摘んでイガを持ってみせる、うり。

「おー、うり、よくやったっ！そんじゃ中身とろっか！」
「あいっ！っじゃあああああ！！！！」
「うりっ！」

そーっともっていたそれを大きく返事して振り上げた・・・ら。

反動でイガ、うりの手にダイレクトヒット!!!

「いちゃあああああ! うああああ!」

「あらあらああ、うりちゃん、こっちおいでえ?」

ミヨコさんがすぐ後からうりを抱き上げて、うりの手を見てくれる。

そして、

「いたいいたいの一、とんでけー?」

「ちゃあああ・・・う?」

いたいのいたいのとんでけーと、何度も繰り返し、手を撫でてやると。

「とんえけー?」

「とんでったねー?」

「いちゃあ、とんえった?」

「どっかにとんでったんだようー?」

「おおおおお!」

驚いた顔で、じーっと手を見る、うり。

「いちゃいの、おいえー?」

呼んでどうするっ!!!

「実に有意義であった。収穫の喜びというものはやはり良いものだ。」

「いっぱいとれたなー、楽しかったっ！」

「あー♪」

3時間程、栗拾いをして。

背中の籠にはみっちり栗がとれた。

途中で茶を飲んだり、バアちゃんとミヨコさんの作ってくれたおにぎり食べたりして、これがまたうまくて。

「今夜はおいしい栗ゴハンつくってねえ？」

「皮むきが大変だけど、おいしいよー？」

皆それぞれに背負った籠は大量の栗。

一日干しておく茹でた時に甘みが増すらしい。茹でて、半分に切って、スプーンですくってたべたりするんだそうだ。

「しばらくおやつに困らないぞ、嬉しいなー？」

「うりたべー♪」

「うむ。実に素晴らしい。」

一つ手にとって見る。

やっぱり、凄くキレイで、おまけに茹でて食べるとか、初めてで楽しみ。

「って、こらっ。」

「う？」

「生でかじっちゃだめだぞっ？」

涎たらしながら、大きな栗を口に入れているうり。

「うりちゃん、茹でてからじゃないとおいしくないようー？」

ミヨコさんがそういつて笑う。

うりのちっちゃい手だと、栗一つもったらもう一杯。

両手に一つずつ握って、嬉しそうに握ったり開いたりしている。

「そんなじゃそろそろ帰ろうかねえ？ ニイちゃん達にもういつこお土産あるからねえ？」

「はいっ！・・・って、栗のほかに？」

「そうよう？ お米とねえ、サンマ貰ったからもっていきなあ？」

「あんま？」

「サンマっていつてねえ、おいしいよう？ 今朝ジイちゃんのお友達が届けてくれたのよう。今夜は栗ゴハンとサンマにするといいよう。」

「素晴らしい、実に食欲をそそる献立だ。」

「おおおお！」

栗もらって、米もらって、サンマのお土産。

家ついたら・・・うー、やばい、ほんと幸せだっ！

帰ったらうまい晩飯だぞ？ 炊きたてなゴハンとか！

そもそも焼き魚なんて一人暮らしてた頃食ったことないし、ババの家に居た頃にも滅多に食ってない。

食欲の秋、最高だっ！

「おニイちゃん二人いるといいねえー？」

「自転車積んでゆうーつくりかえるんだよう？」

自転車の籠には、栗。

荷台には、米！

運転席には、うりが米にしがみついて後ろ向きに座って。

そのハンドルを俺が握り、雲野がサンマを入れたクーラーボックスを下げての帰り道。

バアちゃんとミヨコさんに三人でお礼を言って（うりはえらくご機嫌で歌いながらお礼だった。）落とさないように、ゆっくり歩いて、自転車を押して帰る。

「あーんーまっ！くーい！ししーまいっ！」

一つずつ、もらったお土産を嬉しそうに読み上げてくれる。

・・・がつ。

「うりっ、ししまい違うぞっ！」

「う？」

「しーんーまーい、だっ！」

「いーんーまーいー！」

首をこくこく振りながら、その度に押さえてる（というより乗っかっている）米袋にアゴがぺたぺた。

丈夫な袋で、遥かにうりより重い。

その感触が気持ちいいんだろう、押さえていたはずがすりついて、

抱きつく格好になっている。

「隼人。」

「ん？」

「庭に大根とおろし金はあっただろうか。」

ふと、眉に皺を寄せて呟く雲野。

「あるっ！魚焼くアミもあるぞっ！」

「それは良かった。実に安心した。」

「いくちゃ、よかったえー？」

「うむ。一瞬激しく不安に陥りそうになったが、それより復帰した時のこの気分。実に爽快である。」

そ、そうか。

うん、サンマに大根おろしは大事だよなっ？

「昔ジイちゃんが食わしてくれたことあるんだよ。すっげえ煙でさ。」

「ほう。」

「そんな煙でって思ってなかったから俺、慌ててバケツに水汲んでいったら、ジイちゃん大笑いしてたなー。」

「うりはー？」

「ん、うりは今日な？うまいぞー？」

「おおおおお♪」

喜びの雄叫びをあげるうりをみて目を細めながら、秋晴れの空を見上げる雲野。

夕方になれば、茜色。

その、夕方に飛び交うトンボは、赤トンボ。

いつかの頃は、その赤い背中をみるのが怖かった。
でも、今はただ、懐かしくて。

昔、ジィちゃんとサンマ食った時の空にも飛んでいた、赤トンボ。

空も赤くて、なんだかガキだったのに妙に寂しいような不思議な
感覚で。

それが、「懐かしい」って知ったのはいつだったっけ。

懐かしい、って、寂しいような気持ちがあるのは何でだろう。

今はもう、そこには戻れないから。

過ぎてしまった過去だから。

昔の、楽しかった記憶だから。

それだから、秋は寂しい、っていうんだろうか。

「あっじゃーとーんおー♪いがいがい？ いちゃーいのなーいのー
」

うりが、米袋に腹ばいになって、後ろ向きに空を見ながら歌う。

足をぷらぷらさせて、今日の栗拾いが楽しかったんだろう、歌詞
に「いが」が入ってる。

うりも、記憶の中の「懐かしい」に、寂しくなるようなこと、あ
るんだろうか。

そのうりが落ちないように、軽く左手で押さえている雲野も。

「ん？」

ふと、目が合つて。

どうした？と首を僅かに傾ける雲野。

「秋は秋だなあ。」

「うむ。食欲なり、物思いなり、読書なり。」

「うりー・・は、食欲だろうなつ。雲野は？」

「あいっ！」

名前を呼ばれて、振り返るうり。

雲野の腕に抱きとめられてサドルの上にちよこんと座りなおされる。

「あー♪」

微笑んで、うりの頬を撫でてやる雲野。

「我は、そうだな。今は食欲だな。」

「俺もだっ！」

「うりも！」

「うむ。今日と明日と、栗ゴハンが実に楽しみだ。」

「うっし、ただいまっ！」

「たいあ！」

「戻った。」

庭に自転車を入れて。

「おかえりっ！」

「おじゃあ！」

「おかえり。」

いつもの挨拶をして、荷物を降ろす。

「さて。これから一仕事だ。」

「おう、何すればいい？」

「あいっ！」

ごとっと落ろした栗と、クーラーボックスと、米袋。

いつもの小さな包丁と、もう一つはこの間買ってきた雲野専用包丁。

それを、すらり、と構えろと。

「栗の皮をむく。」

・・・刃物、にあうな・・・。

うりは、井戸へ水を汲みに。

俺は、縁側で栗をむきにいました。

・・・とか、童話調で語ってみたり。

サンマを焼くべく、うりがマキと網を運んできて、カマドにセツトする。

そして、腕をまくって米を研ぐ雲野を眺めながら俺はひたすら栗の皮をむいてみてたりする、秋の午後。

・・・うり、マキの匂いはかなくなってもいいぞ？

「よし。それでは我も栗をむこう。」

「お、さんきゅっ！」

米を釜に入れ、準備を済ませた雲野が俺の隣に腰を下ろす。

栗をひっくり返し、包丁をいれると、さくさくつと皮をむいていく、雲野。

その手馴れた手つきに思わず見とれてみたり。

「うまいなー。」

「そうか？」

「俺のとえらい違いだぞ？」

「問題ない。実に丁寧な出来で好感が持てるぞ。」

「ありがとなっ。これ、全部むくのか？」

籠に大量の栗。

「いや。20もむけば良い。残りは日向に干して後ほど茹でて食す。幾つか焼き栗にしても良いな。」

「おー、なにやら旨そうだなっ！」

「うむ。旨い。」

「しかし、詳しいよな。ほんとに助かってるぞ。」

にと笑う雲野。

寺で料理作ったりしてたのかな。

「えきたっ！」

縁側の下からぬっと顔をだすのは、うり。

指差す方を見てみると、カマドにはしっかりマキが詰められて、網もちゃんと乗せてある。

・・・うり、進化したなあ・・・。

「おお！完璧じゃねーかつ！うり、えらいぞー！」

「うしししっ！」

「うむ。うり嬢、素晴らしい仕事だ。」

ご機嫌でにこーっと笑う、うり。

うんうん、えらいぞー？

・・・と、手元においてむいていた栗がもうない。

後の籠に手を伸ばして、同じように幾つか栗を掴む。

「んむあ。」

「ん？」

「うり嬢。」

んむあ、って、なんだっ？

くるっと振り返ると。

「って、こら、生で齧ったのかっ？」

口をぱかーっと開けて、複雑な表情をする、うり。

いくらむいてあっても、生で食って旨いもんじゃないぞっ（多分）

。

「うむ。実に良い出来だ。我ながら感心してしまう。」
「お、どれどれ？」

にっと笑って雲野が差し出す手のひらの上。
大根の葉っぱと、大根と合わせて塩で漬けたらしい。

「・・・お！」
「うりも！」

一口、口に入れて思わず声が。
うりの口にも一つまみいれてやる。

「うまい！」
「おおおおあ！」

こう、ほんのりいい感じな苦味があるんだけど、それがやな感じ
じゃなくて妙にうまい。

しゃきしゃきしてるのと混ぜてて、・・・これだけで飯食える、
マジで！

茶漬けとかにしたら最高だろうなあ。

「これはうまい！」
「・・・であろう？我ながら上出来だ。実に喜ばしい。」

満足そうに笑うと、口に入れる雲罨。

これで、飯はもうじき炊ける。

大根の葉っぱと、大根の漬物は、最高のが完成。

あとは、サンマ焼いて、晩飯完成！

「・・・つくうっ！」

「ん？」

「やべえ、超なんつか、嬉しいっ！」

うん、ガキかもだけど、構わねえやつ。

なんか、俺単純かもっ。

飯がうまくて、そんでつまみ食いさせてもらって、空は高く夕方
方の風が程よくて。

あとちよつとまっていたら、最高の晩飯とか、ふっと思ったら幸せ
で顔がにやけてる。

「うだー！」

そんな俺の横でうりが飛び跳ねて声をあげている。

嬉しい気持ちとか、浮かれるのって、絶対同調するよな？

一緒にいて、こう、すっげえ幸せなのがほんとに嬉しい。

「実に。」

「ん？」

「幸せだ。思わず顔が緩む。」

そういう雲罨、口角がにと上がりっぱなしで、なかなか珍しい
かもっ？

「んじゃっ！」

アミを前に。

「焼き上げますかっ！」

「おおおおお！」

「うむ、楽しみで仕方がない。」

知らなかった。って訳じゃねえけどっ！

「しっかしすぐえ煙だなっ！」

「実に。日ごろ煙が出るものではないので驚きを隠せない。」

「ほーふー！」

火事に間違われても仕方ないんじやって勢いで立ち上る煙。それを追いかけてみたり、逃げてみたり、大きく息を吹きかけて煙を払ってみたりする、うり。

パタパタ団扇で扇ぎながら焼いているんだけどさ。

ガキの頃の記憶がなかったら、間違いなくあせるよなっ！
すごい勢いで立ち上る煙とか絶対驚く！

「ふあー？」

「ん？」

「ふあーって、こえ！」

ひとしきり遊んで満足したのだろうか。

じーっと煙を見ては、行く先を追いかけて、消えては、又煙を見て。

「ん、煙かつ。もくもくしてるなー？」

「けむい、もくもくー。」

うんうん、と頷いてサンマをひっくり返す。
じゅわぁっと油が滴り落ちて、それでまた、火力が上がる。

「うっ！」

「実に、食欲をそそる。」

「もじゅもじゅ！」

バチバチッと音を立てて爆ぜる薪。

幾つか栗をその中に放り込んであるので、サンマを楽しんだ後には焼き栗が待っているっていう、夕食。

「うり、よだれっ！」

「う？」

「うり嬢、顔を此方へ。無理もない。」

顔を近づけてサンマを覗き込んでいたうり。

口が、半開きっ！

そして、涎が（それを雲野が拭ってやっている。）垂れ流し。

・・・確かに、無理もないよなー？

こんだけいい匂いしてて、目の前でじゅわっと、油がじわっとっ！

「よし。もう良いだろう。」

「だなっ！」

「おおお！」

丁度、いい具合に焼きあがった。
ちよつと早い気がしないでもないけど、焼きすぎるよりはずつと
いい。

皿に乗せて、余熱で丁度いいはずっ！

雲野が皿に一匹ずつ乗せていく。

早く早くって、気が焦りながら大根おろしを持ってくる、俺。

「おああ！」

足をばたばたさせながら、そわそわして嬉しそうな、うり。

うんうん、わかるぞっ！

すっげえ焦るし待ちきれないよな？

急いで大根おろしを置くと、器に栗ゴハンをよそう。

・・・これが、またヤバイ。

釜開けた途端、ぶわっと立ち上る、水蒸気とそのニオイ！いや、
香りか！

慌ててフタをもう一度閉める。

「雲野！うり！！！！これはやばいっ！」

一人で味わうなんて勿体無いし、幸せはおすそ分けだよなっ？
腕ぶんぶんふりながら走ってきたうりを抱き上げて、雲野がそば
に来たのを確認して、釜のフタを、開ける。

「いくぞー！」

バカッ。

ふわっ。

「・・・実に、素晴らしい。」

「うゃあああ♪」

こうさっ！ こういう瞬間と一緒に分かち合えて、喜んでくれるってほんつとに幸せだよな！？

・・・って、サンマ！

一秒でもあつついうちに口に入れたい！

慌ててゴハンをよそうと、三人で縁側に座る。

大根と、葉っぱの漬物と、醤油と、大根おろしと、焼き立てでまだジュワジュワいつてるサンマと、炊きたて栗ゴハン。

「いただきますっ！」

「頂きます。」

「たきあしゅ！」

・・・。

一口、口にいれて。

うりと、雲野と目が合う。

栗はホクホクしてるし、新米がほんのり甘くてっ！
サンマの油と、大根おろしと、醤油がじわーっと染みて。
これがまた、漬物とぴったりでっ！！！

くうっ、ってなるような。

顔が思いつきにやけてるのは間違いない、俺。

勿論、雲野も実に満足げで、うりに至っては、言うまでもないっ！

「うめえええ！！！！」

「実に旨い。」

「うまああ！うまああ！！」

ガツガツ、っていうのが、ほんとにぴったりの勢いで口に運んで
は、飲み込んで。

秋の夕方のひんやりとした空気が、カマドの熱い肌に触れて、暖
かい空気と、ひんやりした空気となって俺たちを撫でて行く。

空は高く、赤とんぼが上空を飛んで。

眩しくて、切なくなるような真っ赤な夕焼けが、やけに嬉しくて。

ほんとに、じっくり時間かけて作って、すげえ旨くて。

食べ終わるとあっという間なんだけどそれがまたなんか嬉しくて
さ。

きっと昔なら、めんどくさいとか思ったりしたんだろうな。

作るの時間かけて、食うの一瞬（ってのはいいすぎだけどさ？）
なら、腹膨れりゃいいだろうって。

「実に、旨かった。ご馳走様でした。」

「いそあまでった！」

「ごちそうさまでしたっ！」

ぱんぱん、と両手を合わせて頭を下げる雲野にならう。

うりが口の周りのベタベタをぺろっとなめてにやーっとするのをみて、つい俺も指先をなめる。

「ほんつとにうまかったなー！」

「実に。」

「あー♪」

腹をぽんぽんと軽く叩いて腹太鼓を披露しながらご機嫌でなにやら歌を歌う、うり。

「どれ、腹ごなしと一服を兼ねて風呂を沸かしてこよう。」

「お、俺も行くぞ？」

「うりも！」

すっくと立ち上がると。

「あいや、隼人とうり嬢は栗を見ていてくれ。そろそろ焼きあが
ると思われる。」

「そっか？」

「あいっ！」

女体灰皿を手にとると、煙草を口にくわえて風呂場裏へ向かう雲野。

カチツと音を立てて、その先端に火を灯し、紫煙を吐く。

「実に、幸福と満足感を感じる。」

「俺もだっ！」

「しやーせー♪」

くるっと振り返り、にっと笑い、雲野が奥へ。

栗を見ていると、・・・って。

「うりー？」

「う？」

「栗の焼け具合ってどうやってみるんだ？」

「むー？」

もうほとんど火は消えて、余熱でしっかり火が通ったんだと思うんだけど。

「よし、試してみよう！」

「あいっ！」

すぐ側に落ちている木の枝で一つ、栗をカマドから取り出してみる。

真っ黒になっていて・・・焦がしたかな。

「くお？」

「うんうん、黒いなー？」

服の裾で押さえて息を吹きかけて覚ましながら栗を割ってみる。

「お、いける？」

「あー♪」

ふわっと湯気が立ち上って、なかなかよさそうな雰囲気。

皮を向いて、それにくつついてきた栗の実を一つ、焼け具合を見
てみる。

「よし、多分大丈夫！雲野待って、皆で食おうなっ？」

「いくちゃー、いっしょー♪くい、いーねー？」

「うむ。ありがたい。早速頂こうか。」

「お。」

「いくちゃー！」

背後から、雲野の声。

俺の手に握った焼き栗を見て、うん、と頷くと、同じように木の
枝でカマドから栗を出す。

「3つずつ、ある。たくさん焼いても良かったのだがな。」

「いや、丁度いいさ。軽く食後のデザートにして、干してあるや

つは明日か明後日でもいいし、また焼いてもいいしっ。」

「つく・・・ほふ・・・まー！」

雲野が、俺の手から栗をうけとり、むいてうりの口にいれてやる。
まだ少し熱くて、はふはふいいながらも嬉しそうだっ。

「うり、うまい？」

「っふ、まー！」

「それは良かった。では、頂くでしょう。」

カマドの前に座り込んで、三人で栗を食べる。

ほんの少し甘くて、ふわっというニオイがして。

丁度食後に適量で、風が冷たくてほんの少し冷えた指先に熱い栗が気持ちいい。

「もう時期、一番星だな。」

「だなっ。丁度食い終わって、風呂入りながら見られるな。」

「ほふっ・・・はー!・・・ふっ。」

思わずうりの声に笑い、雲野を見ると、やっぱり同じように笑っている。

ほっぺたを膨らませながら栗に夢中なうりと同じように、俺も一つ、口に入れる。

「っかー!」

「っじゃー!」

「・・・ほう・・・。」

夏の風呂もたまらないけど、程よく空気がひんやりしてきたあたりの風呂っていうのもたまらないよなっ?

湯につかった瞬間、じわーっとくる感じがこう、たまらなくて。全身にじわじわっとくるのがほんっとに気持ちいいよなー?

「ん、うり嬢。」

「う？」

「泡が。」

うりのおでこについていた泡を拭って、湯で流してやる雲巽。
外を眺めるとしっかり一番星が輝いている。

薄暗くなってきた、星が目立つにはまだちょっと早いけど、丁度
夕陽と星が出てて、なんかいいなあ。

「ほんとに気持ちいいなー。」

「うむ。心地よい。」

「うーにーはーひおいーあ♪」

頭を支えてやって、ぷかーっと仰向けに浮かんでいるうりが歌う、
歌。

風呂の壁に反響して、窓から流れて行く声がまた気持ちいい。

「よし、そんじゃ数数えて風呂あがろつか。」

「了解。」

「あい！」

ばしゃつと湯をかいて、うりが座りなおす。

「んじゃ、いくぞー！いーち、にー、さーん、しー、ごー！」

「おーく、いーち、はーち、くー、じゅー！」

「十一、十二、十三、十四、十五。」

「っぱっ！」

「うめえ！」

「実に、旨い。」

風呂上りに水分を取って、居間にごろんと横になる。

すっかりあったまった体はまだ熱が引かなくて、がらっと開けた窓から入ってくる風が涼しくて・・・

にゃーん。

「えこしゃ！」

「お。」

「えこ殿か。」

にゃーん。

いつもよりも、声が近い。

体を起こして、そーっと土間を見してみる。

「にゃーん。」

土間の外から聞こえてくる声。

そっと下に降りて、ガラッと引き戸をあけてやると、

「お、えこ。」

そこには、小さな、えこ。

驚いて少し逃げたのだろうが、ちよっとずつ近づいてくる。

じーっとこつちをみて、にゃーん、と一声。

「えこしゃん？」

雲野に抱きかかえられてうりが側に来る。

うりを下ろすと、皿に牛乳を入れて持ってきてくれる雲野。

「さんきゅっ。」

「いやなに。」

そーっと土間に置いてやると。

にゃーん。

俺達をみて、皿を見て、何度も見ながら近づいてくる。

にゃーん。

一声鳴いて、牛乳に顔をつけて、ぴちぴちと音を立てて飲む、えこ。

そーっと手を伸ばそうとすると、ぴたっと音が止んで、顔を上げる。

「まだ、触らせてはくれないか。」

「えこしゃん、いっしょ、ねう？」

「今しばし時間を要するが、いずれ共寝も可能だろう。」

手を戻すと、再びぴちぴち、と牛乳を飲み始める。

大分寒くなってきたし、せめて土間に来てくれるようになったの

なら、そのうち家の中にも来てくれるだろう。

立ち上がり、洗濯しておいたタオルを二枚持ってきて、土間のすぐ上の戸棚の側に置いてやる。

「今夜、気が向いたらここで寝ていつてな？」

「朝起きたら布団にいた、でも構わぬぞ。」

「えこしやーん。」

・・・にやーん。

一声鳴いて、程よく腹も膨れたのだろう。

口の周りをキレイにして、毛づくろいをして、ふわぁとおおきなあくびをする。

・・・うにやーん。

じーっと俺の目を見て、首をかしげる、えこ。

「今日はそこ開けといてやるから、出たかったら出ていいし、中にいてもいいからな？」

そっと手を伸ばすと、じーっと見つめて。

でも、ある程度まで近づけると、鼻を近づけて。

撫でようとしてみると、やっぱり体をかわす。

「じゃ、あっちいつてるからな。気が向いたらそこのタオルで寝ていくんだぞ？」

にやーん。

「んじゃ、俺らも歯磨きしてねるかっ。」

「あいつ!」

「うむ。歯を磨いて、軽く茶を一杯飲んで寝ようか。」

うんうん、と頷いて土間を後にする。

これからえこが一緒に寝てくれるようになったらいいな。

ガシガシガシガシ。

軽く口をすすぐ。

雲野がその間うりを向き合って歯を磨いている。

「よし、交代な。」

「うむ。」

雲野が口をすすぎに行く間、今度は俺がうりと向き合う。

「よーし、ほら、口あけてみ?」

「じゃ。」

「はい、ぺっして。」

「ぶえ。」

口の中の泡を出させると、うりの歯ブラシを受け取ってうりの歯を磨いてやる。

小さな口専用の小さな歯ブラシで、ガシガシと磨いてやる間、俺の服の裾を摘んでじっとしている、うり。

「よしよし、えらいぞー？」

「うあー♪」

口の中を泡だらけにしてにかーっと笑う。

「よし、いーってして？」

「ういー。」

前歯を磨いてやる。

「隼人、良いぞ。」

「お、んじゃうり、口ゆすごうな。」

「あにっ。」

うりを抱きかかえて、口をゆすがせる。

イチゴの歯磨き粉の甘いニオイが、水とともに流れていって。

「ぺ。」

しっかりぺっつとさせてすっきりさせる。

外は星がキレイで、空気が澄んでいて。

ほんの少し鼻の頭がひんやりしてくる。

「それでは、居間に戻ろうか。隼人、茶を頼む。」

「任せとけっ。」

「ちゃー！」

「うむ。やはり旨い。」

「嬉しいなー。」

「まっ。」

熱い茶をすすりながら三人で居間でくつろぐ。

耳を澄ませば、虫の声。

「静かだな。」

「うん。虫の声がして、なんか落ち着く。」

静かなんだけど、耳に痛い静寂っていうのとは、違う。

一人、部屋にいた頃は静かな夜って覚えがない。

断続的に時間をおいて聞こえる電車の音、漏れ聞こえてくる人の声や音楽や、機械音。

ババアの家に住た頃は、隣の部屋からテレビの音。

別に、見たかったわけじゃないし、気になるわけではないけど、笑い声が聞こえると無性になんともいえない気持ちになった。

俺の、家に居た頃は。

・・・どうだったかな。

「ん、うり、なにやってるんだ？」

居間の、縁側の側に出て茶碗をもってじーっとしている、うり。おかわりを継ぎ足してくれている雲野。

「う！」

「ん？」

側によってみると、うりの茶碗に、三日月。
外の月が映って、小さなうりの小さな茶碗に、小さな月。

「お、キレイだな。」

「あい♪」

満足そうに頷くと、揺れて月が滲む。

「あ！」

「大丈夫、ほら、じーっとして。」

「実に風流だ。」

俺の茶碗も持ってきてくれた雲野。

雲野と、俺と、うりとで、じっと座って茶碗を持って座る。

ゆっくりと揺れていた波紋が静かになって、ほんのり緑色がかつた茶碗が静かになり。

「実に、素晴らしいな。我らが手に、月が在り。」

うっとり眺める、雲野。

「縁側の外には、えこ殿。その瞳にも、月。」

その目線の先には、じっと月を仰ぐ、小さなえこ。
えこもじっと外に座って、静かに月を見ている。

「実に、貴重な、凜とした空間である。それでいて暖かい。」

「だな。なんか、すげえ貴重な瞬間な気分だ。」
「あー♪」

ああ、そうだ。

俺の家でも。

俺が、家にいた頃も。

静かだけど、寂しくない。

一人でいて、感じる寂しさももちろんだけど、にぎやかなところで感じる寂しさって、あると思う。

静かなところで、それが寂しくなくて、とてつもなく貴重なものに思えて。

うまく口にできない、こういう感情を同じように感じてくれる人が居るんだって、本当に嬉しい。

口から出る言葉は、きつと同じじゃない。
感じる感情も、きつと同じじゃない。

でも、同じ気持ちになれるって、あるんだなって。

こういう気持ちって、凄く静かで、それでいて温かい。

隣の、うりのひんやりした手が。

雲野の、暖かい手が。

えこの瞳の三日月が。

バアちゃんや、ミヨコさんや、あったことないけど、バアちゃん
のジィちゃんや。

住ませてくれた、ババアやタクにも。

ここを残してくれて、大事な事たくさん教えてくれたジイちゃん。

そして、俺を産んでくれて、育ててくれた、俺の両親。

すげえいろんな偶然がうまいことって、俺はここに居る事が出来て、出会えて。

もし、どこかで違う事してたら、きっと今のこの瞬間はなかったんだなと思う。

その違う事して、違う俺もきっと幸せなんだって思うけど。

今、ここに居てくれて、それが絶対無くしたくないから、思える事。

「ありがとう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2290b/>

うりと夏休み～隼人～

2010年10月28日13時32分発行